

南半球便り（その25）：東京2020オリンピック

8月9日

東京五輪が終わりました。コロナ禍というかつてない困難の中で開催された五輪。日本国内の賛否両論は豪州まで伝わってきましたが、豪州から見るとどうだったのか？そこを語ってみたいと思います。

1. 感謝と賛辞

開催中から続々と聞こえてきた声は、「東京五輪は元気を与えてくれた (lift spirits)」というものでした。デルタ変異株のためにメルボルンやシドニーでロックダウンが相次ぐ中、五輪観戦が唯一の明るいニュースであったとの声にも、大きなものがありました。



オリンピックスタジアム（出典：アフロ）

主要紙の中には、「(この時世の中で予防策を万全に講じた上での) 五輪開催自体がメダルに値する。」との評論も登場。「コロナ禍の今、ロンドンやパリ、ロサンゼルスでは開催できなかっただろう。東京だからこそ開催できた。」と私に言ってきた方もいます。

2. 一貫した温かい支持

豪州政府も一貫して五輪開催を支持してくれました。英国でのG7サミットの際に行われた日豪首脳会談でも、モリソン首相から心温まる支持が表明されました。



G7 コールウォール・サミットでの日豪首脳会談

また、参加各国選手団の先頭を切って来日したのが豪州の女子ソフトボールチームであったことを記憶しておられる方も多くいでしょう。チームのその名も、「豪州魂」(Aussie Spirit)。心意気にほだされた私は、群馬太田市で隔離の上キャンプをしていたチームに、「ティムタム」(豪州人なら誰でも知っているチョコレート菓子。)の差し入れをさせていただきました。



大使館チームによる Aussie Spirit への応援メッセージ

嬉しかったのは、開会式に感激したキャンベラ在住の豪州人の方から、感謝のメッセージと共に花束が大使館に届けられたこと！なんと素晴らしい気配りでしょうか。その後の開催期間中、そして閉会式終了後も、本当に多くのメッセージが大使館に届きました。



大使館に届けられた花束とメッセージカード

3. ゴールデン・ガールズとゴールド・ラッシュ

東京五輪では開催国日本の躍進ぶりが国内外で大きく報じられました。在外にいる日本人として、誇らしい限りです。元野球少年の私も、準決勝・決勝戦では、手に汗握って「侍ジャパン」に声援を送っていました。

同時に、豪州の躍進ぶりも目を見張りました。かつて最高であったアテネ五輪での金メダル数に並ぶ17というゴールド・ラッシュ。中でも、お家芸の水泳では、7個のメダルを獲得したエマ・マキオン選手、米国のライバルと接戦を繰り広げたアリアーン・ティトムス選手など、「ゴールデン・ガール」が豪州全土を賑わせました。

4. スポーツ大国

人口一人あたりのメダル獲得数から言えば、豪州は世界トップレベルです。

「何故、豪州はここまでスポーツが強いのか？特に水泳は驚異的。」と尋ねたところ、ある豪州の高官は、こう教えてくれました。

「豪州人にとって海は特別。7-8割の国民が海岸沿いに暮らしている。だから、学校でも子供の時から水泳は必須。泳げない人間はいない。プールを持った一軒に住むのが、『豪州ドリーム。』」

なるほどと、納得がいきました。

日豪の共通項として興味深く感じたのは、両国とも個人競技のみならず、チームワークを必要とする団体競技でも、優れた成績を残したことです。個人競技では、豪州は水泳、セーリング、カヌー、陸上等、日本は柔道、体操、卓球、レスリング、スケートボード等。団体競技では、豪州はホッケー、ラグビー、サッカー、バスケットボール、日本は野球、ソフトボール、サッカー、バスケットボール等です。

「メダル数を稼ぐためだけに『ニッチな』競技を追求することはしない。」との豪州人の発言にスポーツ大国の静かな矜持を感じたのは、私だけでしょうか？

5. 涙とスポーツマンシップ

豪州で五輪のテレビ放映を見ていて、もう一つの日豪共通点として強く印象に残ったことがあります。メダルを獲得したアスリート達が底抜けに明るい歓喜の表情を見せる一方で、しばしば涙ぐんでいたことです。コロナ禍で五輪開催が一年延期され、開催の可否もおぼつかない状況下、困難な調整、練習を重ねざるを得なかったアスリートならではの苦悩と苦勞が偲ばれました。

また、目を引いたのは、スポーツマンシップ、他のアスリートへのいたわりです。優勝候補とされながら日本人選手との争いに敗れた女性サーファーが、敗退が決まった瞬間に波の上でライバルに手を差し出して相手を祝した画面に、私の心は打たれました。

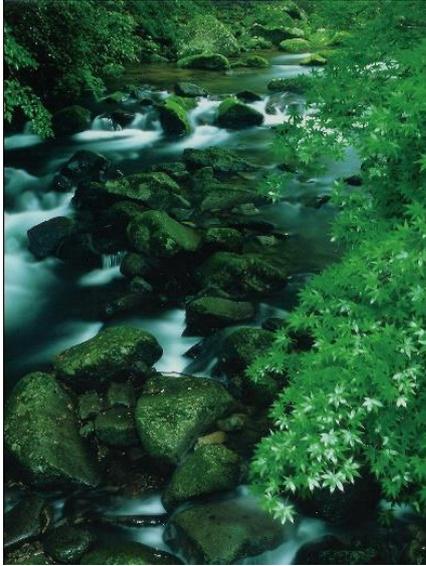
さらに、女子スケートボードで実力があってもメダルに届かなかった日本人選手を肩車した同僚選手の気配りに豪州メディアがいたく感激した有様も、印象に残りました。

スポーツマンシップは日豪を繋ぐ強い絆であると再認識しました。

6. 日本を売り込む格好の機会

ここまで言うと、テレビやストーリーミングばかり見ていたのかと叱られそうです。在外の外交官としては、東京五輪は日本を売り込む絶好の機会でもありました。

サイクリングの背景を彩った緑滴る伊豆の山々、江ノ島でのセーリングの帆の彼方に浮き上がった霊峰富士、大都会東京でのトライアスロンを可能にしたお台場、炎暑に苦闘するマラソンランナーを歓迎した札幌の街並みと鏡のような路面、等々。



伊豆の溪谷



江の島と富士山

(出典：写真提供：静岡県観光協会)



東京のお台場海浜公園



札幌の大通公園

なかなか普段はお目にかかれない画像が豪州人のリビングルームに流れ続けたことの重みを大事にしたいと思います。コロナ禍が落ち着いた暁には、多くの豪州人（日本観光中の消費額は世界一！）が再び日本を訪れることを強く期待しています。

7. 「おもてなし」

思えば、日本ならではの「おもてなし」を売り込んで誘致した東京五輪でした。残念ながらコロナ禍で原則無観客、かつ、アスリートと日本人々との接触や交流が極度に制限されてしまいました。

そのような厳しい状況下でも五輪を粘り強く開催した関係者の尽力に対し、心より敬意と感謝を表したいと思います。そうした気持ちを込めて、豪州オリンピック委員会関係者や選手団が帰豪した折には、キャンベラの大使公邸で小形公邸料理人による丹精込めた和食を差し

上げて労をねぎらい、できなかった「おもてなし」の一端を味わっていただきたいと念じています。



小形料理人の和食料理

8. 2032年ブリスベンへ向けて

東京五輪開催直前，2032年五輪の豪州ブリスベン開催が決定されました。東京での経験を共有し，ブリスベンの成功につなげる。日豪協力の新たな一分野となりそうです。

山上信吾